

学生 NGO が創り出すエコ作戦

山内直哉

私は 2009 年 10 月 11 日の朝日新聞より「大学よ エコ競え」という記事を取り上げようと思う。

日本で環境に最もやさしい大学はどこか、学生らでつくる NGO が全国の大学にアンケートし、9 月に「エコ大学ランキング」を初めてまとめた。環境教育の現状などを点数化することで大学当局や学生の意識を刺激し、対策を後押しするねらいがある。

国公立	① 岩手大	107 点
	② 九州工業大 (福岡)	98 点
	③ 山形大 (山形)	96 点
私立	① フェリス女学院大	87 点
	② 郡山女子大 (福島)	82 点
	③ 成蹊大学 (東京)	80 点

(得点は 125 点満点)

「大学キャンパスは社会の縮図。地球温暖化対策を進めるための『大きな実験室』です。」ランキングを発表した全国青年環境連盟 (エコ・リーグ) の実行委員長で、東京大学院の小川拓哉さんはそう話す。アンケートを送ったのは、国公立 158 校、私立 176 校の計 334 校で、約 3 分の 1 から回答を得た。質問は、二酸化炭素排出量と自然エネルギーの活用、温暖化対策、学生への環境教育、独自の取り組みの 4 分野 14 項である。

国公立で首位だった岩手大の前身は、作家の宮沢賢治が学んだ盛岡高等農林学校。自然と人間の共生の思想を受け継いでいる。学長直属の環境マネジメント推進本部を 2006 年に設置した。毎年度、「二酸化炭素排出量を前年度比 1%削減」などと目標を定め、達成のための計画をつくり、学部ごとの取り組みを点検する。来年度には、環境対策の国際規格「ISO14001」の認証取得をめざすとともに、環境省の自主参加型国内排出量取引制度に国立大として初参加する。大塚尚寛副学長によると、大学当局が積極的に対策を推進する一つの要因として、2004 年の独立法人化に伴う交付金の減額があったという。経費のムダを抑えるため、水道管の漏水箇所を修理し、冷却水を循環式にした結果、昨年度の水使用量は 5 年前と比べ 42.5%減った。昨年からは学生の自主的な取り組みも本格化していった。環境マネジメント学生委員会を立ち上げ、ごみの分別を調査したり啓発ビラを配ったりした。副学長が主宰する対策会議に加わり、大学の環境報告書の作成にも参加し始めた。委員長の高橋幸さんは「今後は大学内だけでなく地域や他大学にも活動のネットワークを広げていきたい」と意気込んでいる。

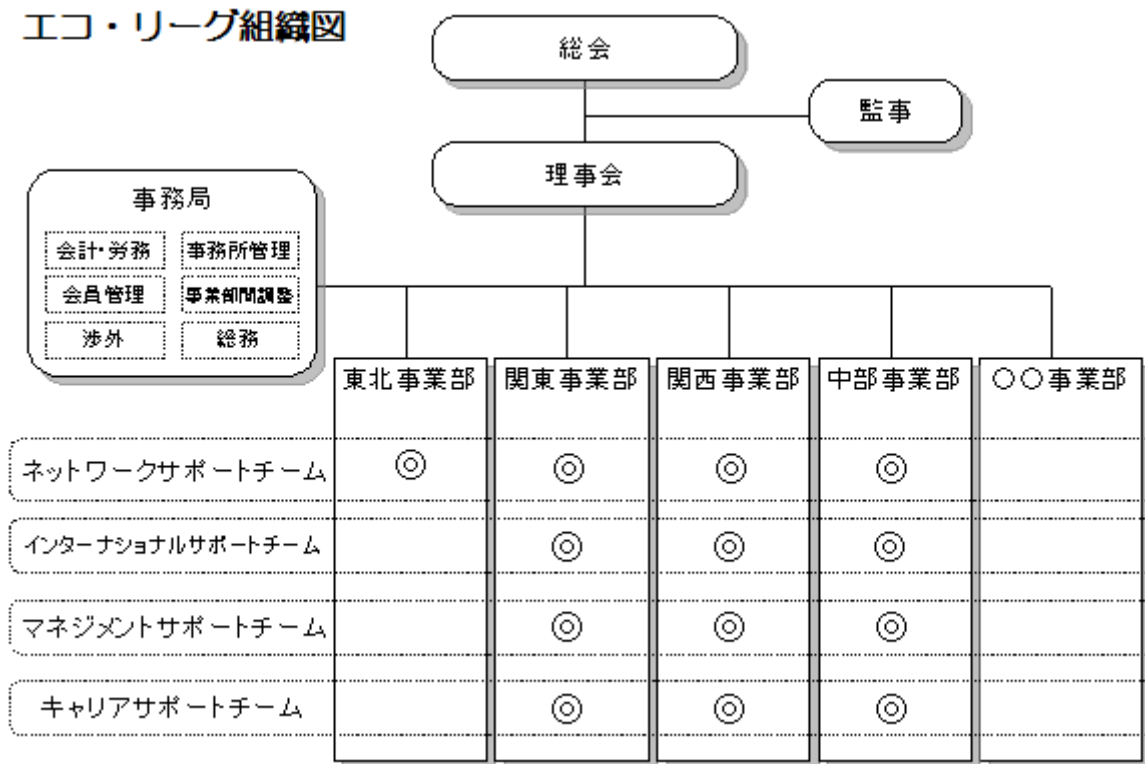
一方、私立で首位だったフェリス女学院大は 2001 年から「エコキャンパス」をめざし、施設整備を進めてきた。その象徴は、高さ 15 メートルの赤い風力発電機だ。太陽光と風力で発電する街路灯が 3 基あり、雨水を利用するトイレや噴水もある。体育館では床下のパイプを通して外気を取り入れ、空調の負荷を減らしている。食堂から出る生ごみを肥料にし、昨年は廃油をバスの燃料にする試みもした。2002 年には学生団体「エコキャンパス研究会」が発足し、施設整備を検討する建築委員会に加わった。活動としては、生物が生息しやすい空間であるビオトープづくりにかかわった。部長の中沢有紗さんは「設備に恵まれ、環境問題が身近に感じられるようになった。就職活動を始めたが、CSR (企業の社

会的責任) 報告書を読むのが好き。環境対策が進んでいる企業にひかれます」と話している。

この新聞記事を読んで私は大学単位でエコを行えばこんなに環境が改善されるのだなと思ひ驚いた。そしてこのように点数化して大学同士が競い合うことによってよりエコに取り組む大学が増えていくと感じた。またこのようなおもしろい企画を開催する全国青年環境連盟(エコ・リーグ)に私は興味を持った。

全国青年環境連盟(エコ・リーグ)は、1994年に発足した環境NGOである。様々な環境問題を考え、行動する全国の学生や環境サークルをネットワークし、青年の環境活動全体を盛り上げることを目的としている。地球規模から地域までの環境問題の解決を目指す青年の活動が連携し、互いに発展、活性化しあう共通の場を創ることを通じて地球環境問題の解決を目指す。環境問題解決の実践活動を通じて青少年が社会に主体的に参加する喜びを学び、また広く市民がこれらの活動の場に参加できる機会を提供する。各々の活動を通じて、我々とさらに将来の世代にわたる新しい時代の在り方を模索し、かつこれを実現する方法を見出している。会員数は約250名、スタッフ東北事業部(約10名)、関東事業部(約20名)、中部事業部(約20名)、関西事業部(約20名)により活動している。

エコ・リーグ組織図



上の組織図を見て分かるように、学生が作ったNGO団体とは思えないくらい組織体制がしっかりとしている。ネットワークサポートとは、活動する300団体、3000人を繋げることである。国際サポートとは、世界で活躍する国際環境活動家の育成を目的とし、アジアの青年と連携を深めている。マネジメントサポートとは、学生の能力を最大限に引き出すことである。そのためにスキルアップトレーニングを行い、学生ならではの課題を解決していく。トレーニング内容としてはミーティングの方法、運営、広報などが挙げられ、お悩み相談会の開催も行われている。キャリアサポートとは、職業情報の

提供と、環境マインドを持つ社会人を増やすために、環境就職進路相談会や環境系大学進路相談会、ギャザリングや大学生環境活動コンテストなどが行われている。ギャザリングとは、「環境問題に興味はあるけど、何をしたいのかわからない。」「今の活動だけじゃなくて、もっといろんな活動がしたい。」「周りの人に、自分の活動をもっと知ってもらいたい。」などの意見を持ったそんな人達が集まり情報交換をする『場』、夢や思いなどを伝え合い、話し合い、刺激しあう『場』そして、新たな活動を生み出す『場』である。北海道から沖縄、はたまた海をも越えて高校生から大学生、そして社会人まで環境問題に対して熱い思いをもった人たちが、年齢や経験を越えて一堂に集う宿泊型総合青年環境イベントのことであり、毎年約 250 人が全国各地から集まってくる。

上記の環境系大学進路相談会では高校生を対象にえこみゅにけーしょんが開かれる。90年代になって始まった環境ブームは完全に定着し、企業も行政も「環境」抜きで語れない時代になった。大学でも「環境」をテーマにした学部、学科が相次いで設置されてきている。しかし、もともと学際的かつ新しいテーマなので、どの大学でどんな研究をやっているのか、非常に分かりにくくなっている。パンフレットを見ても分からないなんてことも多々ある。そこで「実際に大学で学んでいる人に直接聞いてみよう。」ということで始まったのが、この「えこみゅにけーしょん」である。エコロジーをテーマに、大学生と高校生の異世代交流を図るということで、「エコ+コミュニケーション=えこみゅにけーしょん」と名付けられた。進路相談会では、現役大学生がカウンセラーとなり、各大学・学部のブースに来た高校生の質問に答え、自由に話せる場を設けている。どのような思いで授業やゼミ、サークル活動等に取り組んでいるかなど、生のキャンパスライフについても触れ、大学で勉強し活動することの面白さを高校生に感じてもらいたいと考えている。相談を受けるカウンセラーは、大学 3、4 年生もしくは大学院生で環境についてゼミなどで学んでいる大学生だ。エコ・リーグのネットワークを通じ協力してくれている人たちである。パンフレットでは得られない生の情報の提供を行うことができる。受験をする際には、ついつい大学選びだけに力をいれてしまいがちで、大学に入学した後に何が出来るのか、ということまで考える余裕が無いことが多いのでそこで講演会・パネルディスカッションを通して、実際に大学を卒業した後どういう道があるのか、また学生でも出来る活動（学内活動・学外活動）とは何なのかを伝えている。また関西の 2 会場では、環境に関するクイズを行っている。このクイズでは、参加者の方と大学生カウンセラーと一緒にチームを組むことでより話しやすい雰囲気作りをする。また、参加者同士が互いに話をして、打ち解け合える場を提供している。そしてこの交流会により、大学進学後も情報交換できるようなネットワーク作っていきたいと考えている。大学生を中心とした有志によって運営され、みんな大学進学時に自分自身が悩んだ経験をもつメンバーである。高校生の皆さんの不安・悩みを少しでも解消して、希望をもってそれぞれの進路を見つけてもらう手助けをするのがえこみゅにけーしょんなのである。

またエコ・リーグの活動テーマは、大学構内の環境負荷低減・EMS活動、省エネの呼びかけ、ごみ分別、レジ袋有料化、エコ学園祭・エコ祭り、学園祭でのごみ分別指導、洗い皿導入、環境教育、地域の小学校に出張授業、大学講義の企画・運営、リサイクル市、卒業生の家具を新入生へなど多種多様である。

近年、青年が参加する環境関連の国際会議が増えてきたものの、参加した日本の青年の多くが国際会議への参加が初体験で、英語力の不足、国際会議の経験不足を実感している。これは、日本では青年の国際的な環境活動を支援する安定的な基盤がなく、個々の団体、個人に活動が行なわれているため、活動が散発的で、ノウハウが拡散しているからである。そこで、国際チームの新事業ではエコ・リーグが支援基盤を確立させ、主体的に活動の計画から運営を実施することで、国際的な場においてもリーダーシップの取れる人材を多く

育成していくべきである。英語でコミュニケーションができる青年も多く存在するが、環境活動をしている学生には少ない。日本の青年がリーダーシップを発揮するには、適切な人材育成・支援基盤が必要となってくると私は感じた。

我が近畿大学でも、理工学部には社会環境工学科があり、地球環境から地域のまちづくりまで、幅広い視野と高度な技術を身につけ、時代をリードする建設技術者・環境技術者の養成をめざしている。道路や橋の建造、上下水道の整備、河川などの護岸など、社会を根底で支える建設技術を身につけ、自然環境保全技術やすべての人々が暮らしやすいまちづくりの方法など、さまざまな課題への挑戦によって、豊かで快適な社会を創造する技術や手法を身につけ、国際的に活躍できる技術者を育てている。また環境ボランティアも多数存在しており、荒廃した里山を、ため池を中心に復活させるプロジェクトを進行していたり、川で生物調査を行い維持・管理をしたりしている。

私がこのレポート課題をするにあたって、環境は小さなことの積み重ねによって改善していくのだなと感じた。今大学が競ってエコや環境の改善に努めている。私も近畿大学という素晴らしい学校に在学しているのだから本学を他大学に負けない環境に関心があり実行力のある大学にしていきたい。今日の私の小さなエコが明日の誰かのエコに繋がっていけば良いなと感じることのできた課題となった。

参考文献

- ・ 朝日新聞 2009年10月11日 27面記載記事
- ・ エコ・リーグが提供する学生・青年の環境情報総合サイト ECO2000
- ・ よくわかる最新地球環境とエコの基本 エコ・リテラシーを高める第一歩 生物共生とは？ 吉村忠与志著